

童文学に近代のもののVとの謬見を捨てて、近代以前の児童的文化としての江戸期子供絵本への偏頗なき関心を育てることであるだろう。

このふたつの課題が果された時、内ヶ崎有里子さんのこのワンダフルな書物、『江戸期昔話絵本の研究と資料』を越える研究書が見れるにちがいない。それが今より幾年かの後でないことは確かであって、そのことは内ヶ崎さんのこの大著の素晴らしさを証拠立てるものとして慶賀するけれど、幾十年もの後になるとすれば、内ヶ崎さんに関してはよろこばしく、しかし日本の近世文学・児童文学研究の総体的見地からすれば、いささかならず悲しいという価値付けにしなければならぬのだが――

(三弥井書店、一九九九年、八九〇〇円)
(かみ・しよういちろう／児童文学者)

書評

内田順子著

『宮古島狩俣の神歌 その継承と創成』

真 下 厚

狩俣の神歌研究、そして広く祭儀のなかの神歌伝承についての研究を飛躍的に前進させる書物が世に出た。

この地の神歌研究は稲村賢敷氏によって始まったが、外間守善氏・新里幸昭氏によって秘伝であった龐大な数の詞章が記述され、報告されることとなり、大きく進められることになった。その後、本永清氏によつてほぼ同じ種類の神歌についての別の報告もなされている。こうした神歌は、村外者にはもちろん、神役以外の村人たちにも、秘して口承されてきたものであって、これらの調査報告がその詞章を記述し、明らかにしたことは大きな意義の存するものとして高く評価できよう。こうした研究がなければ、我々は狩俣の神歌の全体像を知ることができず、複雑な祭儀と神歌とに分け入ることはとてもできなかったであろう。しかし、その成果として報告されたものは、書物の性格上、それらの神歌が立ち

現れる場との関わりについて十分に記述されたものではなかった。また、これらの資料はその詞章のことばについて共通語訳を付したものであったが、神歌を伝承する神役たち自身の理解とどのように関わるのか定かではなかった。もつとも、外間・新里報告資料の場合、言語学的な見地から付された共通語訳であるから、その点において一定の意義をもつとはいえよう。また、狩俣方言についての知識を持たない者にとつて、こうした共通語訳は神歌の内容をいくらか知る手引きともなるものであったことも認めていいだろうが。

本書はこうした先学の立場や方法を批判して、祭儀のなかにおいて神歌を捉え、それをよむ神役の女性たちの心に徹底して寄りそうことによつて、神歌に迫ろうとしたものである。神歌を外側からでなく、いわば内側から捉えることを目指したものである。そして、そのことによつて「神歌のかたち」を見出し、

これまで知られなかった神歌の体系を解き明かすこととなったのである。こうした研究は

著者が狩侯のおばあち（沖縄では年長じた女性を、敬愛の意を込めて、「おばあ」と呼ぶ。宮古地方では神役の女性たちを敬って「おばあ」と呼ぶことが多い）の信頼を得、思いを通じることによって初めて可能になったといえよう。かつて狩侯では、神を恐れるあまり、長くよそ人に対して厳しい目が向けられてきた。それが、地元の研究者などの努力によって、この十年余り前から少しずつやわらいでくるようになった。そうした流れのなかに、著者と狩侯のおばあちとの出会いはあったのである。評者も、狩侯の人々の知恵に学ぶ一人として、この出会いによる大きな成果を喜ぶものである。

さて、本書は「序章」「第一章 神をまつる人たち」「第二章 神歌をならう」「第三章 神の名」「第四章 神の座敷」「第五章 神の思ひ」「第六章 やわらいであれ」「第七章 神歌のかたち」「終章 神歌の伝承と変容」の九つの部分からなる。

「序章」では、狩侯の概要や特徴を述べ、歌詞資料集・楽譜資料集・論著の順に先行研究の先のような問題点をあげて、本書の課題

とする神歌がよまれる祭儀の場に向かおうというのである。

オーラルな言語表現をその生成の場において捉えようとする著者の問題意識はきわめて正当である。狩侯の祭儀を遠くから見学することが少しずつ黙認されるようになってきた九十年代初めより祭儀の場において神歌を考へることが必要だと思われてはいたが、その詞章を祭儀の場において遠くから聞き取ることはかなり困難であって、それは神歌を伝承する神役たちに直接習わねばならなかった。

先のような問題意識をもち、おばあちの信頼を得た著者はまたそのようなことばを聞き取る能力をそなえており、繰り返しで生成される、複雑で捉えがたい神歌の世界をここに解き明かすこととなったのである。その成果は第一章以下に示されている。

「第一章 神をまつる人たち」では狩侯の祭祀を執行する各種の神役たちなどについて記述し、「第二章 神歌をならう」では神歌をよむ役目の神役に選ばれた女性が神歌を習得し、口承してゆくようになるまでについて記述する。この二章は本書の総論にあたる部分である。

ここでは、「神歌は誰でも聞くことができ

るものとして存在してはいない」（五七頁）という重要な指摘がなされている。性別・所属する祭祀集団・神役としての立場などの違いがあつて、村落の構成員は等質ではないのである。その立場を越えて神にむやみに触れるはならないということであろうし、また知ることのできないということである。たとえ長老として村落の指導的立場に立つような男性であつたとしても、神話の知識からは遠いのである。なお、この点は、神々の「歴史」に關わつて、第五章で論じられることになる。

また、神歌の伝承に際しては詞章のみが伝えられ、「神歌の意味は個々に見つけてゆくものとしてある」（七〇頁）という指摘も重要である。神歌の詞章を先祖から伝えられてきた神聖なことばとして飲み込んでゆくというのである。E・A・ハヴロック「プラトン序説」がいうように、オーラルな詩の詞章は朗誦者が感情移入しやすいのである。そして、このことは伝承されてきた詞章を改変させる危険をはらんでいる。「意味がはぎ取られた状態で与えられる」（六八頁）というのは神役たちの感情移入を排して伝えられたままに朗誦するということであろう。こうした詞章を伝承する一つの方がここに見出される。

そして、それとともに、神歌詞章の意味を意識する神役たちの姿をも浮き上がらせることになる。これはとりわけ第六章で、狩俣草創の物語を伝える「ハライグイ」という神歌をめぐって、説かれることになっている。

次の第三章から第六章までは、狩俣の祭儀でよまれる各種の神歌を、神役に就任して従事する祭儀でよむ順に取り上げ、神役たちが知る「神歌のかたち」について説いてゆく。

「第三章 神の名」では、就任した神役が最初によみ上げるカミフツを取り上げる。祭儀のさまざまな場面でカミフツはよみ上げられるが、神役たちは神の名を入れたり抜いたりしてその場にふさわしいカミフツにするという。また、カミフツのなかで所作と結びついた一定の詞章が長大なカミフツ詞章を分節化しているという。祭儀の場における複雑な生態をもとに、こうした「神歌のかたち」を明らかにしてゆくところはみごとである。また、この所作と詞章の結びつきについて聴覚的・視覚的に区切りを感じるができる（八三頁）とするところについて、声という身体的な表現を扱う上で視覚・聴覚的要素は重要な点であって、こうしたことについてよく留意されているといえよう。

「第四章 神の座敷」はビヤーシと呼ばれる神歌について述べている。「ビヤーシの叙事の特長は、それを先唱するサスの立場から祭儀の様子が厳密に描かれるというところにある」（一〇七頁）とするのであるが、ビヤーシの叙述と祭儀内容とが結びついていることを具体的に解き明かしてゆく箇所は、平板に思われる詞章がダイナミックに立ち上がってゆくような感を覚えるところである。神歌を祭儀の場において捉えようとする本書の大きな成果であろう。ただ、「神歌のかたち」に關わって、「祭儀の場で他のサスたちに連なつてよむことを通して、神が定めた秩序を知ることができる」（一〇八頁）とする著者の結論について、それを支える、アブンマ以外の神役たちの発言を注のかたちでもほしいところであった。

「第五章 神の思い」は神衣をふるわせながらよむタービと呼ばれる神歌について述べている。この章も、祭儀の場と關わって行われる、詞章の精緻な分析が大きな成果を上げているところである。「個々のタービの冒頭に置かれている「根口声」は、はじめによまれた神の名が、それが始祖神ヌマカンからみて、いかなる關係にあるのかを位置づける

役割をはたしているのである。神ひとりひとりの側からの表現をとっている」（一二七頁）という指摘によつて、類型的にみえた部分が意味をもったものとして立ち現れてくる。「根口声」の後に続く神の物語の部分について、その神自身の立場から叙述したものであることを論証しているところ（一二九―一三三頁）も大変説得的である。

神の名が三人称でよまれたり、「私」として表されたりすることから、こうした人称の交替によつて「思う主体」が曖昧になるという効果を生んでいる」（一三五頁）とするところはアブンマの説明に寄りそう興味深い指摘であるが、こうした「効果」とはどのような位置づけられるものだろうか。それはなぜ生まれてきたのか。もう一段の論述のほしいところであった。

「第六章 やわらいであれ」は、冬のウヤーン（祖神祭り）のときによまれる神歌フサについてである。この神歌は、ウヤーンのととき鎮まりきれない死者の魂が次々に現れるが、それをやわらげるためにその思いをよんでやるものだとしている。

このフサの冒頭第四節までは低い声でよまれ、次からは強い声でよまれることを指摘し、

それは神が憑依したことを表すとしている。こうした発声形式の違いもオーラルな言語表現の問題として重要であって、著者の観察と考察は細やかで鋭いものである。

また、大城元という聖所でよまれるフサの多くがフサヌヌスという専門的な神役によって伝承されているのであるが、ウヤーンのとキアブンマという神役によって一度しかよまれない「家の主親母のフサ」の詞章を中心にその構成について分析することによって、こうした詞章構成の特徴からヤーヌウヤンマという女神からその姪マヤーマツメガという神にフサがよみわたされたという神話に密接に繋がると論じる。そして、このことから、祭儀の場においてフサの先唱役がアブンマからフサヌヌスに交替するというかたちでフサがよみわたされているのであり、またアブンマやフサヌヌスがこうした「神歌のかたち」であるフサの詞章構成の違いを知っているということが重要なのだと説いている。このところ、知的興奮を覚えるところの多い本書のなかでも、まさに圧巻というべき部分である。

「第七章 神歌のかたち」は補論というべきもので、神歌の詞章や旋律の形式などについて説く。ここでも著者の聞き取った神役た

ちのことばが確かなものとして生きている。また、神の性別によって神歌をよむかどうか、神役が参加するかどうかが定められていることを神役たちが知っているという指摘も祭儀と神歌を考える上で重要である。

「終章 神歌の伝承と変容」では、こうした「神歌のかたち」が神の言葉の違いの違いを表したり、伝承されてきた神歌詞章が祭儀の場で「創成」(著者は、神歌がよまれるとき、伝承と変容の要素が関わりとみるところから、これを「生成」と呼ばず、この語を用いたものであらう)される際にはらんでいる変容の可能性に歯止めをかけるものであることを説いている。ある年の祭儀で「ハライグイ」をよむ際に詞章が付加されたという事例を取り上げて、それは神が言わせたものであり、そうしたことを受け入れる神役社会があること、またその一方でこうした変容に歯止めをかけるのが「神歌のかたち」であると論じてゆくところ、膨大な神歌についてのさまざまな「かたち」を神役たちが知っていると説いてきた本書の終章としてふさわしいものである。本書は狩俣の神歌を対象としたものであるが、こうした祭儀のなかの呪的な詞章を言語表現の立ち現れる場において捉え、またそれ

を表出させる神役たちの伝承意識にそって把握しようとするところは、他地域の呪的詞章についての研究と緊いでゆくことができる。こうした方法と成果を高く評価した上でいうところであるが、本書のなかで神役たちの伝承意識にそっているのが明らかでないように思われるところやそれをやや超えているのではないかと思われる部分がある。たとえば、第六章の祭儀のなかのフサの「かたち」においてウフンマからマツメガへのフサのよみわたしがなされるという分析はみごとであるが、こうしたものは神役たち自身が意識していることなのかどうか。また、「魂を付着させる行為として解釈することは可能だろう」(一三三頁)、「今まさに神が人にのつたということを示しているのではないだろうか」(一四六頁)などは神役たちの意識を超えてしまっていることはないだろうか。たとえばステイブン・フェルドの「鳥になった少年」においてなされたように、著者の解釈や論理が神役たちに返されたときどのようになるであろうか。これは著者の方法を越えることではあろうが、そうしたことも知りたいことであつた。(神への畏れが存する狩俣では実際には困難であり、また別の問題を引き起こすことにな

るかもしれないのではあるが」。

次に神歌の伝承において詞章のみが伝えられるという点に関連して。「意味がはぎ取られた状態で与えられることば」(六八頁)ではあろうが、一方ではある程度それを解釈する「伝承があつたらしい」(一一八頁)のではないか。こうした神歌のことばを解釈するための伝承はさまざまにあつたのではなからうか。さらには、本書の問題とするところではないが、村落全体のこととしてみるならば、神歌を祭儀の中心において伝えながら、それを解釈するようなものから、こうしたものとは大きく異にするようなもので、神歌の知識から遠い人々をも含めて、さまざまなレベルにおいて伝えられてきたという実態があるのではなからうか。

また、ウヤーンとフサの意義についてである。亡くなった神役たちが歌をうたうというのは祓いの儀礼であるマトウガヤーのときだけなのではなからうか。これをウヤーンの祭儀全体のこととして一般化することはできないのではないか。「フサで死者の魂を招き、その思いをよんでやることによって、それをしずめ、はらう。フサの機能のひとつはそれである」(一一五〇頁)とするが、「真津真良の

フサ」の真津真良などは悲劇的な死を迎えたわけではない。一方、「八重山ウシメガのタービ」のウシメガなどは悲劇的な死を迎えたようである。「しずまれぬ神々」(一一五三頁)として解せられるかどうか。

なお、序章において「真津真良のフサ」の報告資料の異なりが指摘されていたが、これはどのようなこととして考えられるのであろうか。問題点として宙づりにされたままではなく、神役たちの語るところなり、著者の見解なりを示してほしいところであつた。

さらに、本書は今日の神歌の伝承について緻密な調査・研究をなしたものであるが、こうした詞章は神役集団のなかでいつごろどのようにして生み出されてきたのであろうか。

また、そのような段階における神歌の伝承とはどのようなものだったのだろうか。

優れた本書に接して、狩俣神歌への思いは広がることである。

(A5判二八三頁、思文閣出版、二〇〇〇年二月二〇日刊)

(ましも・あつし／立命館大学)